

家庭科教育の昭和史とともに生きる―宮原小治郎小伝

第二部

『家事及裁縫』とともに (4)

佐々木 享

(名古屋大学教授)

創立五周年記念会

『家事及裁縫』誌は順調に成長し、一九三二(昭和七)年には六年目(雑誌で見れば第六巻)を迎えた。六十三歳になった小治郎の感慨はひとしおだった。この年三月五日、家事及裁縫社は創刊以来の寄稿家および講習会の講師ら百余名を帝国教育会館(現在の日本教育会館の前身)に招待し、感謝の念をこめて「創立五周年記念会」を開いた。

祝辞の中で帝国教育会事務長の西脇豊造は、雑誌の目覚ましい発展ぶりにつき「誰がやってもこうは行かぬ」と主幹宮原小治郎の識見と手腕をたたえ、同時に「機運がそうさせた事も見のがす事の出来ない原因の一つ」であり、女性の使命に對する自覚という機運をつかんだところに小治郎の非凡さが

ある、とたたえた(第六巻第四号)。大妻高女校長の大妻コタカは、雑誌の発展は「現代女性の要望するところとぴったりに合致したのと、今一つは主幹宮原氏が、南船北馬、献身的に斯道の提擧にお尽くしになったことに職由する」とたたえた。実際、雑誌創刊後の小治郎は、本土各地はもろろん、遠く朝鮮、「満州」にまで読者(小治郎は必ず「誌友」と言った)を訪ね、また家事・裁縫関係の地方の研究会のほか、各地で開かれる女教員の大小の集会にもこまめに足を運んでいる。こうして小治郎の肌で感じ取った「機運」が雑誌の誌面を生き生きとさせていたと言えよう。ちなみに言えば、小治郎は雑誌創刊前の一時期、大妻高女に勤務していたことがあったらしい(沼畑金四郎「創刊当時の思い出」第十一巻第四号、三七〇頁)。

この記念会で挨拶した小治郎は、謝辞に続けて、「本社創立以来一面に於ては誌上を通じて斯の道の向上研究を図り、一面に於ては講演会及び研究会等を開催し、更に時代の促進すべく特別号等を発刊して、聊か斯界の為に微力を捧げてまいりました」と自負を開陳した。小治郎は「右手に雑誌『家事及裁縫』を提さげ、左手に四季折々の講演会をかざして、斯道のため聊か尽瘁してまいりました」と述べたこともあり(第五巻第十号、九九頁)、講習会、研究会等を雑誌と並ぶ重要な事業とみなしていたのである。

家事及裁縫社の多彩な講習会・研究会

五周年記念会の模様を伝えた第六巻第四号の記事には、夏季および学年末等の学校休業中を利用した講習会、研究会は一回に及んだとある。ところで、朝鮮から帰国後の小治郎が関係したと思われる講習会等を一九三二年三月までの分につき筆者の気づいた限りで整理すると表1のごとくで、一回という回数を東京家事講習所の創立（一九二五年）以降で数えたのかどうかは判然としない。恒例化していた夏季講習会も毎年「第〇回」と呼称していたわけではない。例えば一九三〇年夏の講習会を雑誌の記事は第一一回としていたけれども、これも二八年のそれが第五回だったとするとつじつまが合わないなど、まことにおおまかな数字にすぎない。

開催回数とはかくとして、小治郎の企画する講習会は、婦女新聞社時代に始まって恒例化した夏季の家事及裁縫講習会を中軸とし、女子手工科、趣味の手工、現代作法、裁縫の創作的学習、洋裁、手芸、栄養料理というように、テーマは広がり、しだいに多彩になっていった。このうち二回限りとなったのは木下竹次奈良女高師教授による裁縫の創作的学習講習会のみで、これ以外のテーマの講習会は後にさらに回を重ねていく。講習会での報告のうち的主要なものは、次々に雑誌で紹介され、特に木下教授の講習の報告には四巻十二号のほぼ全頁があてられた。

表1 宮原小治郎の関係した講習会等一覧（1922～1931年3月）

名 称	期 日	備 考
婦人文化講習会・子供服手芸講習会	1922. 7. 25～31	婦女新聞社主催
家事裁縫講習会	1924. 7. 29～8. 5	婦女新聞社責任後援・東京家政女学校主催
常設家事講習会	1925. 4. 10～7. 19	東京家事講習所主催
現代家事暑期講習会・教育文化講習会	1925. 7. 29～8. 5	東京家事講習所主催・婦女新聞社責任後援
第3回家事裁縫講習会	1926. 7. 31～8. 6	婦女新聞社主催
第4回家事及裁縫夏季講習会	1927. 8. 1～	牛込高女, 580名
第5回現代家事及裁縫夏季講習会	1928. 8.	牛込高女, 600名
高等小学女子手工科冬季講習会	1928. 12. 2～28	
創造主義裁縫教授講習会及研究会	1929. 3.	
現代家事及裁縫講習会	1929. 8. 1～7	
趣味の手工・現代作法冬期講習会	1929. 12. 26～30	
裁縫の創作的学習講習会	1930. 3. 27～29	
第11回現代家事及裁縫夏季講習会	1930. 8. 1～7	牛込高女, 380名
裁縫教育研究発表大会	1930. 11. 9～10	170名
現代作法・洋裁・手芸講習会	1930. 12	
第1回栄養料理講習会	1931. 3	栄養学校と共催
現代家事裁縫講習会	1931. 8	
雑誌発刊5周年記念会	1932. 3. 5	
第2回栄養料理実習講習会	1932. 3	栄養学校との共催
作法・洋裁講習会	1932. 3	

「家事及裁縫の10年間」(11巻4号)などによる。

## 講習会・研究会への情熱

数多くの講習会や研究会が必ずしも収益を目的としていなかったことは特筆に値する。実際に小治郎は、若干の講習会については、少なくともよい、一〇人でも二〇人でも結構ですから関心のある人は参加して欲しいと呼びかけていた（第二巻第十二号など）。講習会、研究会を組織して自ら学び取った新知識を積極的に広めていく活動を展開した若き日の小治郎の情熱（本連載第一部第五回）は脈々として生きていたのである。

夏季講習会の日程中に、帝国ホテルや精養軒での会食、国会議事堂や被服廠の見学などの企画を組み入れるよう努力してきたこと、以前から日光観光を試みてきたことなども、狭い視野に閉じこもりがちな地方の女教師に少しでも広い知見を与えようとしたからであった。

裁縫教育研究発表大会は、講習会とは趣を異にする別個の流れに位置づけられた。全国の教育現場等から研究発表を募り、その口頭発表を基に講師を含めて研究討論するものである。この研究会は識者から注目されたし、現場教師の勉強家を励ます場でもあった（例えば第十一巻四号、三三六頁参照）。小治郎自身もこの種の研究会をことのほか重視し、以後は家事教育、手芸教育、栄養教育などについても研究発表大会を開催している。

## 講習会参加の女教師は和服だった

ところで家事及裁縫社の昭和初期の夏季講習会に参加した女教師たちは、『家事及裁縫』第六巻第四号（一九三二年）等の写真に見る限り、ほとんどすべて和服であった。厳密な考現学的調査ではないけれども、一九三七（昭和十二）年の夏季講習会に参加した女教師の洋装は「わずかに一割」にすぎなかったという。雑誌では女教師の洋装が写真入りで論評されている（『夏季講習会に於ける女教師の洋装を観る』、第十一巻第十号）。意識していたかどうかは別として、ここには考現学の手法が用いられていたわけである。なお、この年の東京を除く全国一五都市を平均した女性の洋装は平均して二二帛だったというから（朴木「民主的的家庭科教育を求めて」『家庭科研究』一九九一年十月号）、女教師の洋装は、一般の女性のそれより遅れていたと言えよう。

## 栄養学の開祖佐伯矩

家事及裁縫社が主催した各種の講習会のうち栄養料理講習会だけは、一九三一年の第一回以来終始一貫して栄養学校（現在の佐伯栄養学校の前身）との共催だった。

栄養学は、科学の世界では珍しく日本人によって提唱され確立した科学である。佐伯矩（たかすけ一八七六―一九五九）は三高医学部卒業後の一時期北里柴三郎指導下の伝染病研究所に勤務、一九〇五（明治三十八）年から一一年までアメリカに留

学して栄養研究に従事し、帰国後若干の準備期間を経て一九一四（大正三）年、東京に（私立）栄養研究所を創設した。脚氣に悩まされてきたわが国は鈴木梅太郎のビタミンB発見に代表されるごとく栄養問題への関心が高かったといえ、医学、生理学的研究のみならず、実践的性格を重視する栄養学確立への佐伯の気迫はすさまじく、栄養研究の重要性を説く佐伯の主張は医学界、政界に入れられ、一九二〇（大正九）年には、欧米にもまだ類例のなかった国立栄養研究所が設立された。以来二〇年にわたって所長を勤めた佐伯は、一九二六、七年には国際連盟の第一回交換教授として欧米各国を歴訪するなど国際的に知られた学者でもあった（佐伯芳子『栄養学者佐伯矩伝』一九八六年、玄同社）。

佐伯の活動はきわめて実践的で、国民栄養調査、国民栄養協会の設立、学校や工場等の給食指導、家事科教師たちへの栄養思想の普及・啓蒙など広範にわたっていた（荻原弘道『日本栄養学史』一九六〇年、国民栄養協会）。こうした栄養研究の発達と普及が背景にあったので、栄養素に関する事項は大正期の高等女学校の家事教科書には未整備な記述ではあったけれどもほぼ出そろった（江原絢子・石川寛子「家事教科書からみた調理教育の史的研究（その2）」『家政学雑誌』第三十七巻第一号、一九八六年）。国立栄養研究所創設のころには、教科書の栄養の栄（または宮）の文字が栄に統一されてくる。

#### 栄養学校の創設と栄養料理講習会

佐伯は、国立栄養研究所が創立されると、私立栄養研究所のあとに、科学的な栄養思想の普及と国民の健康増進を図るために栄養に関する専門的知識を教授する栄養学校を創立した。この種の専門的教育を受けた者に栄養士の称号を与え、病院や学校給食などの食事の栄養管理に貢献させる試みはこの学校から始まったもので、佐伯の先駆的業績の一つである。専門職としての栄養士を制度化する栄養士法が成立したのは第二次大戦後の一九四七年であった。

『家事及裁縫』誌への佐伯の寄稿は、「栄養研究は世界的趨勢」（第二巻第六号）に始まり、「栄養の基礎知識」（第三巻第十二号）など二〇編以上に及び、小治郎が早くから佐伯の仕事に注目していたことが分かる。この執筆の縁で始められた栄養学校との共催による栄養料理講習会（または実習講習会と称した）は、実習を含むために定員が限られ（当初五〇名、のち七〇名）、いつも希望者過多で断るのに苦労しながら、一九四三年の第二四回まで続けられた。

栄養問題については、佐伯自身のほか、杉本好一、原徹一、黒田理、小田静枝など佐伯のもとに育った国立栄養研究所の学者が常に寄稿していた。原の寄稿は五〇編以上にのぼっている。こうして栄養に関する記事は、『家事及裁縫』の誌面の重要な構成要素となっていた。